

ことばの意味が「わかる」ということ

—外国人児童生徒の文章語理解—

早野慎吾

(都留文科大学文学部)

要 旨

使用される語彙の難易度が高いと指摘されている小学校高学年の社会科教科書を用いた語彙理解度調査を、外国人児童生徒および日本人児童生徒に対して2007・2008年に実施した。調査内容は被調査者自らが理解度を判定する調査と、調査者が理解度を判定する調査の2種類で、日本人、JSL(Japanese as a Second Language)、FJB(Foreigners of Japanese Birth)の属性ごとに不理解度を分析した。その結果、日本人は専門性の高い語彙だけ不理解だったのに対し、JSLは一般的な文章で使われる語彙の不理解が多かった。FJBは、日本人とJSLの中間的な状態であった。日本語を日本語で説明する説明値(メタ言語能力)において、JSLは在日期间の長さと同比例の関係にあるが、FJBは分散が大きく最上位の話者もいれば、在日期间3年8ヶ月のJSLよりも低い話者もいた。FJBの日本語力は親の日本語力と高い相関関係があり、親の日本語力が子の日本語習得に大きく影響する実態が確認できた。また、日本生まれでも、日本人とFJBでは日本語習得状況が大きく異なる実態が明らかとなった。ことばの意味が「わかる」と判断する基準は、話者の日本語力と高い相関があり、日本語力の高い話者は適切に説明できないと「わかる」と判定しないが、低い話者は読みができるだけで「わかる」と判定する傾向が強かった。

キーワード：JSL FJB 教科書語彙 語彙理解度 説明値 グラフ値

1. はじめに

外国人児童生徒における教科教育の研究報告は、教科書教材の語彙や文型など文献に関するものが多い。そのような研究の意義は大きいですが、同時に外国人児童生徒の日本語力に関する実態調査も必要である。実際に外国人児童生徒にとってどのような語彙や構文の理解が困難で、日本人とどのような違いがあるかを分析することによって、より高度な教育支援が可能となる。

小学校で使用される教科書語彙の難易度は学年や教科によって異なるが、高学年の社会科の難易度が高いという指摘が多い(工藤他1999、白鳥他2000、松井・早野2006)。そこで、早野他(2010)¹⁾では、外国人児童生徒および日本人児童を対象に、高学年社会科教科書を用いて実施した語彙理解調査の結果を報告した。本稿はその継続研究である。外国人児童には外国生れのJSL(Japanese as a Second Language)だけでなく、日本生れで日本育ちの話者も含まれている。早野他(2010)では、その日本生れの外国人児童をFJB(Foreigners of Japanese Birth)と表現した²⁾。FJBには、日本生れであっても保護者の母語を第一言語として習得している話者が含まれている。

本研究では日本人、外国人(JSL・FJB)児童生徒の属性で語彙理解にどのような違いがある

かを明らかにし、さらに「わかる」と判断する基準が各属性の日本語力とどのような関係にあるかを分析する。

2. 調査概要

2007年5月から2008年8月にかけて栃木県真岡市にある真岡小学校・真岡東小学校・真岡西小学校・真岡中学校での児童生徒に対する調査を行った³⁾。調査項目には真岡市が社会科教科書(調査当時)として使用していた『新編新しい社会5下』(東京書籍平成18年度版)で日本の風土と大きく関係した単元「わたしたちの国土と環境」の「さまざまな自然と暮らし」(pp. 30-47)を使用した。調査は語彙調査と文章調査を行ったが、本稿では語彙調査のみを扱う。語彙調査は話者判定調査と理解度調査の2種類を行った。話者判定調査はことばの意味について「わかる」「わからない」を話者自身に判定してもらう調査で、教科書 pp. 40-41, pp. 46-47 に使用されている語および他のページに使用されている外来語6語を追加した215語(項目)について行った⁴⁾。理解度調査は話者にことばの意味を説明してもらい、どの程度理解できるかを調査者が判定する調査で、215語から抽出した41語について、「説明できない」「辞書的な説明ではないが、だいたい意味を理解できている」「辞書的な説明ができる」の3段階で判定した。漢字表記の語彙に関しては漢字の読みについても確認している。

話者判断調査の被調査者数は外国人児童生徒53人(JSL 26人、FJB27人)、日本人54人の計107人。理解度調査は話者判断調査を行った話者の中から外国人児童生徒21人(JSL 10人、FJB11人)、日本人16人の計37人に対して行った。JSLの母語はポルトガル語13(5)人、スペイン語11(3)人、タイ語1(1)人、タガログ語1(1)人で、FJBの保護者の母語はポルトガル語10(3)人、スペイン語13(7)人、タガログ語3(1)人、ベトナム語1(0)人である(())内は理解度調査の話者数)。すべて非漢字圏である。JSLの在日期間は6ヶ月-12年6ヶ月(3年0ヶ月-12年6ヶ月)で、平均で5年9ヶ月(7年0ヶ月)である(())内は理解度調査の話者の在日期間)。

3. 話者判断調査

図1は、各語で「わからない」と回答した率(不理解者率)である(早野・宮田 2011)。JSLにとって難易度が高い順に配列してある(左側の語ほど難易度が高い)。日本人で60%以上が理解できなかったのは「にっこうきすげ/日本三景/尾瀬ヶ原」の3語で、地理(特定分野)に関係した専門性の高い語彙だけなのに対して、JSLは「気象庁/研修会/にっこうきすげ/路面/日本三景/尾瀬ヶ原/国土/月別/平均/機械整備/海峡/高山植物/設備/同ふうする/地形/民家/電子メール/貴重な/フェア」の19語で、一般的な文章で使用される語彙が多く含まれている⁵⁾。この19語のうち、国立国語研究所(1984)の「基本語二千」に含まれているのは「平均/設備」の2語、工藤(1999)「基本語A」(6種類の資料から3種類以上に共通している語)に含まれている語は1語もない。基本語だけでは教科教育に対応できない実状がここにある。

215語における不理解語数の平均は日本人12.28、FJB33.07、JSL50.85で、日本人との差はFJB20.79(p<.01)、JSL38.57(p<.01)である。FJBは日本人とJSLの中間に位置している。日本人とFJBの理解語の種類は近いが理解者率に大きな差がある⁶⁾。日本人とFJB

で 20%以上差があった語は「月別／民家／路面／地形／気象庁／平均／周辺／世界遺産／
 問い合わせ／月別平均気温／クリーン活動／電子メール／設備／四季／アウトドアスポー
 ツ／真冬／産地／登録する／国土／収穫／スピードスケート」の 21 語である。それらは特
 定領域の単元語ではなく、分野語や文章語であることがわかる。また外来語も多く含まれ
 ている⁷⁾。図 1 から、日本人、FJB、JSL の理解者率に大きな差があることがわかるが、
 実際には理解度においてさらに大きな差がある。

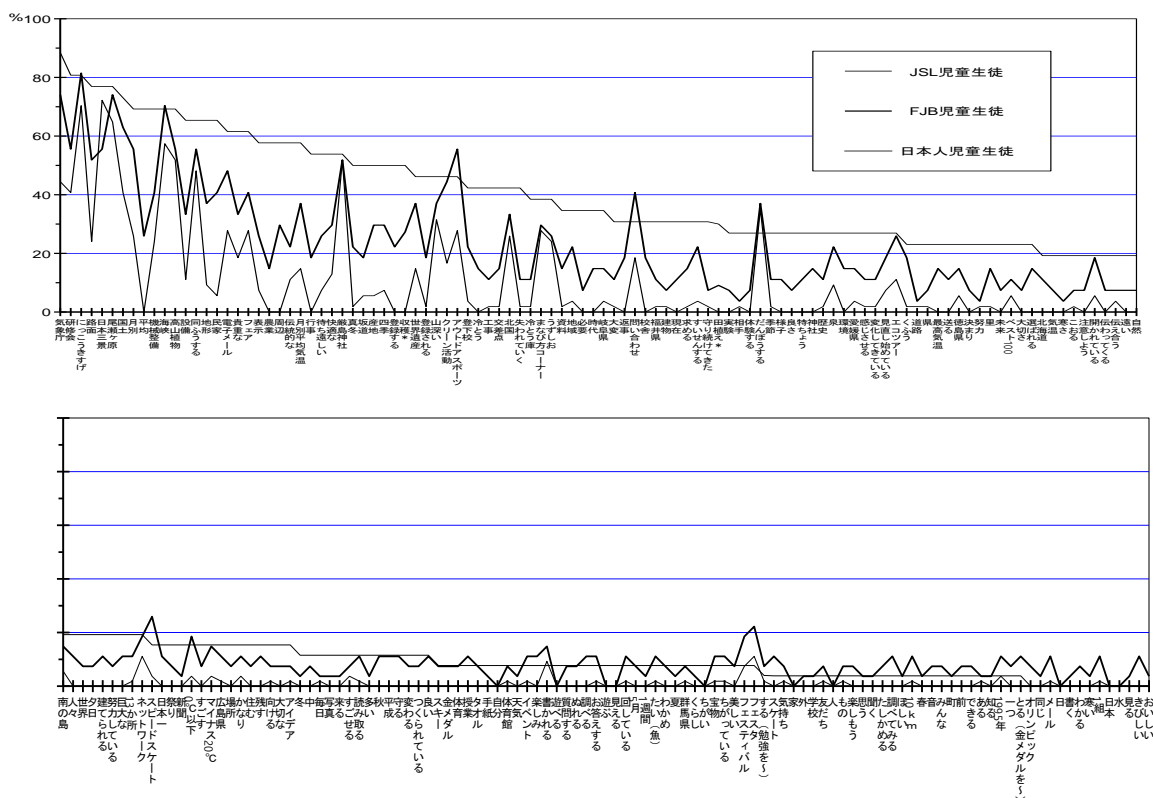


図 1. 話者判定の不理解率 (215 語彙) (早野・宮田 2011 : p. 132)

4. 理解度調査

4.1. 説明値 I と話者判断値

図 2 の説明値 I は理解度調査の 41 語⁸⁾ において、まったく説明できていないか、間違
 った説明をした場合を 0 点、辞書的な説明ではないが、だいたい意味を理解できている場
 合を 1 点、辞書的な説明ができていない場合を 2 点として算出した結果(平均)である。説明
 能力は、あることばを説明する能力(メタ言語能力)であり、日本語力の大きな要素と考え
 られる。従って説明値は日本語力値と表現することができる。

日本での居住経歴が浅い JSL ほど説明値 I が低くなっている。これは、当然のことと言
 えるが、日本生れで日本育ちの FJB が日本人と違った傾向を示している。日本人はほぼ説
 明値 I の高い領域にまとまって位置しているが、FJB は全体的に分散している。FJB には、
 説明値 I が全体で最も高い話者もいれば、在日期間 3 年 8 ヶ月の JSL よりも低い話者もい
 る。説明値 I の範囲(最高値から最低値を引いた値)は日本人 0.78(1.66-0.878)、

FJB1.51(1.68-0.17)、JSL0.90(0.90-0)でFJBは日本人の2倍近い値となっている。属性別説明値Iの平均は日本人1.30、FJB0.93、JSL0.45で日本人との差はFJB0.36(p<.05)、JSL0.85(p<.01)である。FJBとJSLの差は0.48(p<.05)である。

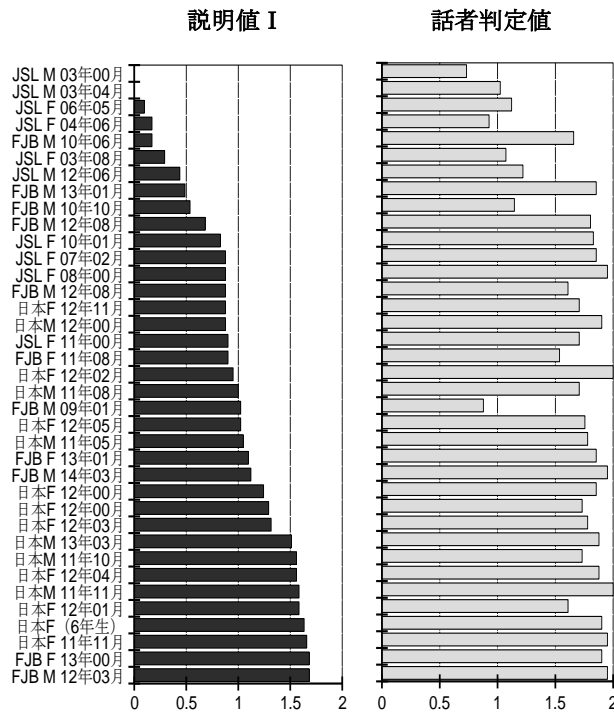


図2 説明値Iと話者判定値

図2の話者判断値は、「聞いたこともない」を0点、「聞いたことがある」を1点、「わかる」を2点として算出した結果(平均)である。説明値Iと話者判定値の単相関係数を求めると0.70(p<.01)で正の高い相関が認められる。話者判定値に比べ、調査者⁹⁾が日本語力を判定した説明値Iの方が、理解度の差が明確に出ていることがわかる。特に日本語力の低い話者ほど説明値と話者判定値の差は大きい。

なお、理解度調査の41語を数量化理論第Ⅲ類で分析すると次の図3のようになる。相関係数はI軸0.42(固有値0.18)・II軸0.329(固有値0.11)である。I軸はマイナス値の高い値に「海峡/日本三景/国土」などがきてプラス域の高い値に「場所/努力/巨大」などが位置しているので、意味内容の理解難易度を表している軸と解釈できるもので、マイナス域の高い値ほど難易度が高い。II軸はプラス域に「にっこうきすげ」だけが低い値を示し、マイナス域の高い値に「海峡/登録/泉/世界遺産」などが位置しているので、表記としての難易度を表している軸と解釈できるもので、マイナス域の値が高いほど難易度が高い。

図4の説明値IIは理解度調査の41語において「わかる」と回答した語に限定して算出した値(平均)である。ブラフ値(Bluff Score)は負の説明値といえるもので、「わかる」と回答したが、説明できないか間違った説明をした場合を1点として算出した値(平均)である¹⁰⁾。配列は図2と同じ話者を並べている。図4から説明値IIの高い話者ほどブラフ値が低いことがわかる。

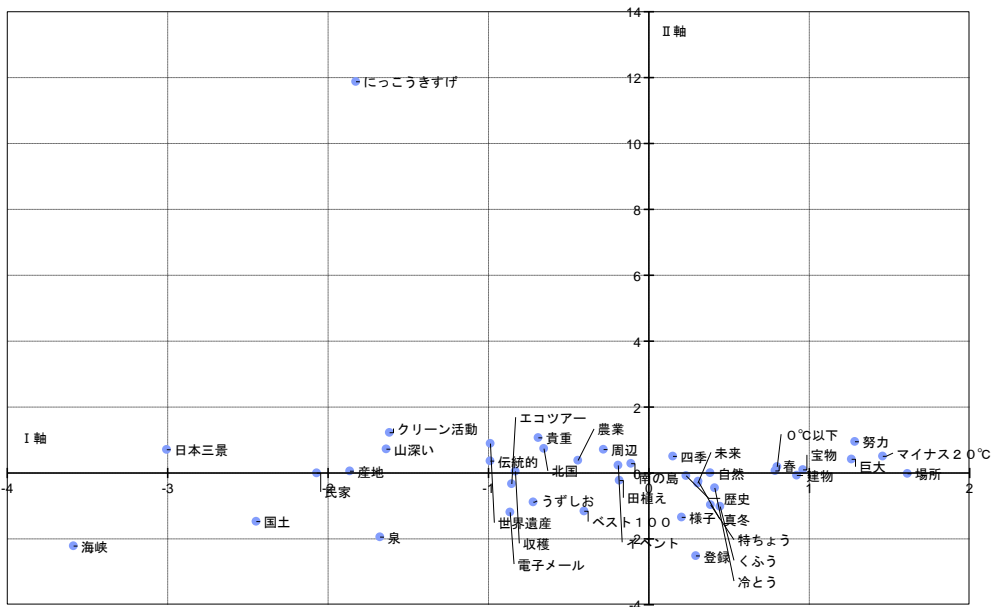


図3 数量化理論第Ⅲ類(説明値Ⅰ) n=107

ブラフ値と説明値Ⅰの単相関係数は $-0.83(p < .01)$ 、説明値Ⅱでは $-0.79(p < .01)$ とかなり高い負の相関が認められる。確かに、説明値Ⅰが0点のJSL(2人)も、それぞれ14語、20語に対して「わかる」と回答している。さらに「わからない」と回答した語に限定した説明値を算出して説明値Ⅰとの単相関係数を求めると、 $0.48(p < .05)$ となり、かなりの相関が認められた。日本語力の高い話者は、ある程度説明できるにも関わらず、適切な説明ができないと「わからない」と回答する傾向がある。それに対して日本語力の低い話者は説明できなくても「わかる」と判定している。つまり、日本語力が高い話者ほど「わかる」と判断する基準が高いことが確認できた。

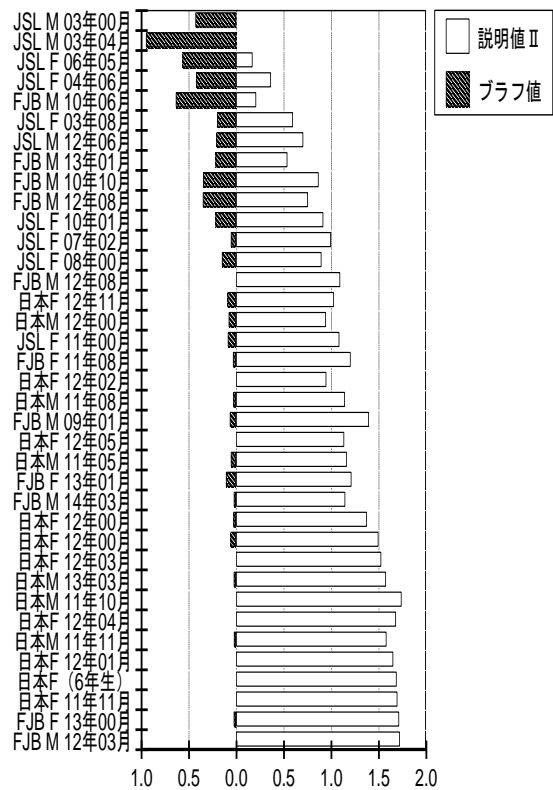


図4 説明値Ⅱとブラフ値

4.2. 語彙別の説明値Ⅱとブラフ値

図4は語彙別の説明値Ⅱとブラフ値を属性別に提示したものである。語彙配列は、JSLの説明値Ⅰの低かった順に配列している。日本人で説明値Ⅱの低い語は「にっこうきずげ／

海峡／国土」などの単元語・分野語、もしくは説明しづらい「山深い／登録」である。FJBは日本人よりも全体的に説明値Ⅱが低い。日本人と比べて特に低いのが「産地／泉／収穫／北国／田植え／農業／イベント／クリーン活動／電子メール」などである。「クリーン活動」などは、語そのものを知らなかったとしても「クリーン」と「活動」がわかっていたら説明できると思われる項目で、実際に日本語力の高い話者は初めて見る語と反応していながらも、適切に説明できている場合も多かった。FJB、JSLの語彙理解力は単に知識だけの問題ではない。

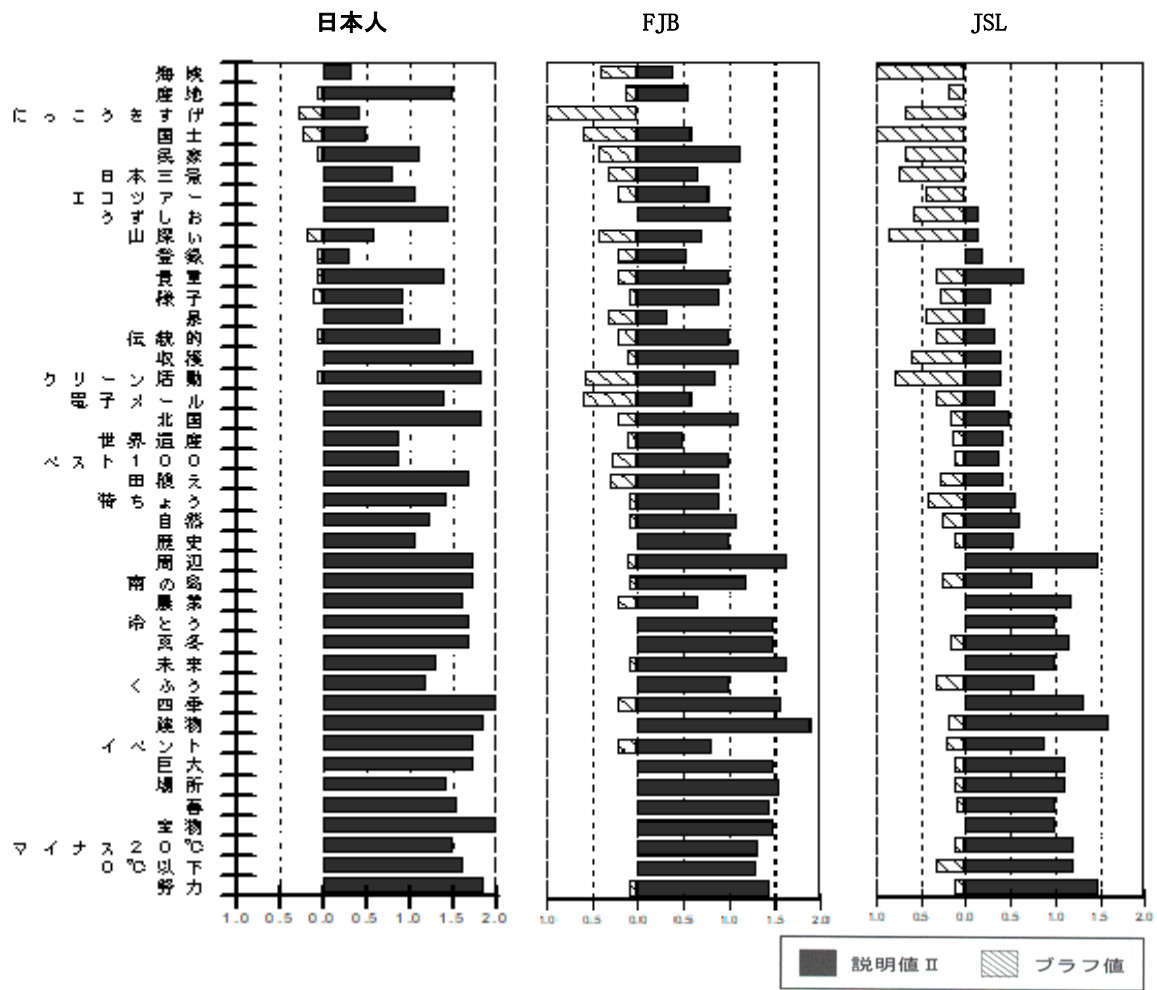


図5 語彙別の説明値Ⅱとブラフ値

JSL に関しては「海峡／産地／にっこうきすげ／国土／民家／日本三景／エコツアー」の説明値Ⅱが0点で、日本人と比較して極端に低いのが「うずしお／様子／泉／伝統的／収穫／クリーン活動／電子メール／北国／ベスト100／田植え／特ちょう」などである。この結果が在日期間3年程度の話者であれば問題ないが、在日期間7年以上の話者が5人(5/10人)いることを考慮すると、JSL 児童生徒が日本語を習得するのに適切でない状況に置かれているとも考えられる。

JSL でブラフ値が高い語には「にっこうきすげ／国土／民家／日本三景／クリーン活動／山深い」などのひらがな表記のものか簡単漢字で読みができるものが多い。日本語学習

歴の浅い JSL は、読みができると「わかる」と判断する傾向がある。

5. 社会的要因

5.1. 説明値

在日期間、日本語使用時間(1日)、日本語学習時間(1日)、テレビ視聴時間、両親の日本語力などと説明値およびブラフ値の相関関係を見てみる。両親の日本語力は児童生徒が4段階で判定した値である。

JSL の場合、在日期間と説明値 I の単相関係数 0.71 ($p < .05$) となっており、ほぼ決定的な要因となっている。テレビの視聴時間との単相関係数は 0.51 となっているが、他に説明値に有効な項目はなかった。在日期間の浅い段階では、テレビは言語習得に非常に有効であると考えられる。

FJB に有効な要素は両親の日本語力とテレビ視聴時間で、それぞれの単相関係数は母親の日本語力 0.70 ($p < .05$)、父親の日本語力 0.53、テレビ視聴時間 -0.55 となっている。特に母親の日本語力が大きな要素となっている。テレビの視聴時間は、JSL の場合と異なり負の相関となっている。ブラフ値とテレビ視聴時間の単相関係数は 0.69 ($p < .05$) となっており、テレビの視聴は多くの語彙に触れる点では有効であるが、深い理解にはつながっていない。聞いてはいるが、説明できないという語彙を増加させていると考えられる。日本人の単相関係数は、説明値 I -0.253、ブラフ値 0.40 となっており、FJB と同じような傾向が観察できる。

5.2. 不理解語数

家庭での母語使用時間(1日)、在日期間、日本語使用時間(1日)と不理解語彙数の単相関係数を求めると表1のようになる。FJB の在日期間は年齢のことであり、母語使用時間は親の母語を使用する時間のことである。JSL で母語使用時間の係数が高い。日本語を習得していなければ、使用するのは母語だけなので母語使用時間が長い話者ほど、語彙習得率が低いのは当然の結果と言える。しかし FJB においても低い相関ながら正の値をとっている。親の母語使用時間が長いほど不理解語が多いということである。FJB で日本語と親の母語を併用している話者の平均不理解語数は 48.92、日本語のみの話者は 18.36 で両者の差は 30.57 ($p < .05$) であり、二言語を併用している話者は日本語のみ使用している話者よりも不理解語数が多かった。

表1 不理解語彙数との相関係数

	JSL (n=26)	FJB (n=27)
在日期間	-.442*	-.382*
母語使用時間	.489*	.246
日本語使用時間	-.281	-.330

* $p < .05$

5.3. 語彙の習得について

家庭で母語を使用している話者の不理解語数が多いのは、二言語併用そのものが問題なのではなく、家庭環境に要因があると考えられる。実際、図2で2番目に説明値Iの高かったFJBは家庭で二言語併用と回答している(ただし日本語中心)。家庭で母語を使用する場合、教育的配慮から母語を使用していることは少なく、その多くは、親が日本語をできないために母語を使用している。FJBの日本語不習得の状況は、日本人であれば当然親から子へ伝えられているはずの語彙が伝えられていないために起きたと考えられる。説明値Iと両親(特に母親)の日本語力との相関係数が高かったのはそのためと推測できる。親の日本語力が子どもの日本語力に大きく影響を与えている。

図5の語彙別説明値IIで、FJBが日本人と比べて特に低かった語は「産地／泉／収穫／北国／田植え／農業／イベント／クリーン活動／電子メール」であった。調査地である真岡市は稲作などの農業が盛んな地域であり、この地域で生活していれば「田植え／農業／収穫／産地」などは日常よく使用される語である。それらの語を親が日常生活の具体的な場面で使用するのを聞いて、子は習得していくものと考えられる。日常生活で親から子供へ伝えられるべき日本語が伝えられていなかったことが、それらの語の説明値が低かった原因と考えられる。子は親を通して地域社会と交わる部分が多い。親が、日本語ができなければ、地域住民とのコミュニケーションも少なくなり、親自身が地域社会に関する語彙を習得することが困難になる。両親が地域社会に入り、地域社会に必要なことばを習得し、さらに子に教えることが必要である。

6. おわりに

本調査から、「わかる」という判断基準は日本語力と大きく関係しており、日本語力の高い話者は適切に説明できる場合に「わかる」と判断し、日本語力の低い話者は説明できなくても「わかる」と判断していることが明らかとなった。

またJSLだけでなく、FJBの実態を明らかにした。日本生れで日本育ちであるがゆえに特別な支援は必要ないと考えられがちなFJBであるが、実はJSL以上に支援が必要な場合もある。現在の学校教育は、日本人、FJB、JSLという日本語力の大きく異なる児童生徒を対象としている。従来の教育方法では対応することは困難であり、日本語研究者の支援を必要としているのが現況である。

【注】

1. 早野他(2010)の現地調査は2007年5月から8月にかけて行った。対象は栃木県真岡市の日本人児童40名、外国人児童39名、宮崎県、鹿児島県の外国人留学生29名である。本稿では、真岡市の児童(日本人・外国人)のデータを含めて分析する。
2. 早野他(2010)で不理解語彙について整理したが、体言に限定して不理解語の共通項を抽出したら図6のように日本人 \in FJB \in JSLの関係が成立した。①-⑤の分類は国立国語研究所編(2004)による分類で、①は抽象的關係、②は人間活動「主体」、③は人間活動「精神および行為」、④は生産物および用具、⑤は自然物および自然現象、⑥は①-⑤以外である。

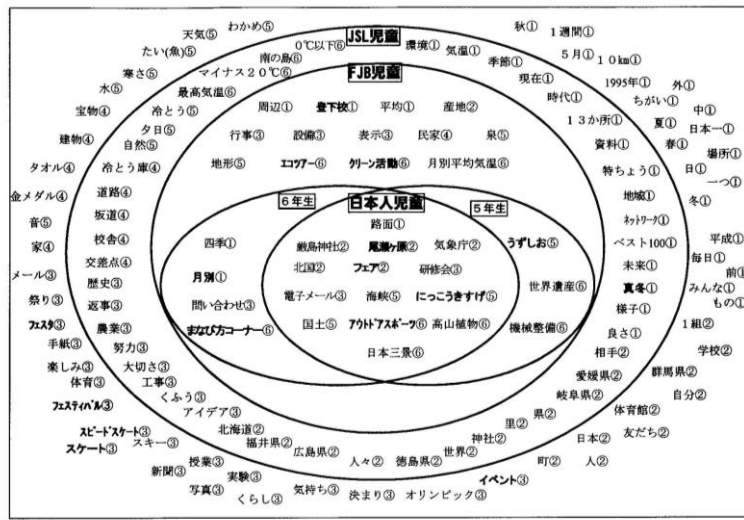


図 6 20%以上の不理解語の共通項 早野他(2008:p. 162 より)

3. 中学生に対しては2008年8月に、日本人3名、FJB6名、JSL8名に対して行った。
4. 実際は「ほこり」(ほこりに思うの「ほこり」)を含めた216語について調査しているが、埃と勘違いしている話者もいたために分析からはずした。今回は早野他(2008)の調査項目に、さらに「収穫／田植え」の2語を加えて調査した。「収穫／田植え」の2語に関しては母数が異なる。
5. 教科書に使われている語彙を本稿では、文章語(一般的な文章に使用され、その分野以外でも使用される語)、分野語(たとえば地理という分野では、地形や国土のように、その分野でよく使われる語)、単元語(厳島神社や尾瀬ヶ原のように、その単元でしか使われない可能性が高い語)に分類する。
6. 理解語の状況が近いことから、語彙習得の状況が近いと考えられる。
7. 2018年から2019年にかけて3回、本調査と同一の調査を茨城県つくば市在住の外国人留学生に対して実施した。対象者は31名(漢字圏21名、非漢字圏10名)である。その調査で漢字圏留学生には仮名による語彙の難易度は、漢字仮名まじり語彙や漢字語彙よりも高かった。一見、仮名による表記はやさしく感じるが、実際は意味を理解しにくいことも多い(松井2019)。
8. 説明値とブラフ値では算出方法が異なる。また、説明値Ⅱは「わかる」と回答した語の数、ブラフ値は「わからない」と回答した語の数を母数として算出している。
9. 説明値の判定に関しては、調査員による差を排除するためすべて松井洋子が判定した。
10. 今回の調査では説明できるかどうかを判定しているのであり、実際に知っているかどうかの判定ではない。

【参考文献】

- 工藤真由美(1999)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』ひつじ書房
 工藤真由美 木幡智美 玉井裕子(1999)「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査—教科書の語彙との比較調査から—」『国文学 解釈と鑑賞』64-1 至文堂

- 国立国語研究所(1984)『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
- 国立国語研究所(2004)『分類語彙表(増補改定版)』大日本図書
- 白鳥智美 玉井裕子 小澤容子 樋口万喜子(2000)「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査－社会科教科書の語彙－」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 早野慎吾 松井洋子 田中利砂子(2008)「外国人児童生徒の教科書理解度に関する研究－社会科教科書を用いた語彙調査から－」『2008年度日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 早野慎吾 松井洋子 宮田好恵(2010)「外国人児童の語彙理解に関する研究－社会科教科書を用いた語彙調査から－」『Ars Linguistica』17
- 早野慎吾 宮田好恵(2011)「年少者の言語能力と学力の関係－社会科教科書を用いた語彙調査から－」『Ars Linguistica』18
- 松井洋子(2019)「非日本語話者の日本語理解度に関する研究」『日本語文化の研究』2
- 松井洋子・早野慎吾(2006)「年少者に対する日本語教育支援に関する研究－宮崎地区の現状と課題－」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』15

【付記】

本研究は日本語学会 2009 年度春季大会の発表要旨に、その後、2018・2019 年に茨城県つくば市で実施した調査の結果を加えて整理したものである。日本語学会の発表要旨は、筆者の他、実地調査に参加した田中利砂子、宮田好恵、松井洋子、川添桃、小田原恵美子、田村京子と共著となっている。本研究の調査データは、宮田好恵と松井洋子が整理して、筆者が執筆した。注でも述べたが、説明値の数量化はすべて松井洋子が行った。

なお、つくば市調査は松井(2019)でまとめているが、これは日本教育公務員弘済会平成 30 年度奨励金研究「外国人児童生徒の学力向上のための教材開発」(代表：早野慎吾)によるものである。

(2021 年 10 月 2 日 受理)

(2021 年 11 月 10 日修正原稿 受理)

A Study on Understanding the Meaning of Words :
Comprehension of written language by foreign children

Shingo HAYANO
(TSURU University, Faculty of Letters)

Abstract

In 2007 and 2008, we conducted a vocabulary comprehension survey of Japanese and non-Japanese children in the upper grades of elementary school, using textbooks of the upper grades as survey items. The survey consisted of two types of surveys: one in which the respondents judged their own level of understanding, and one in which the researcher judged their level of understanding. As a result of analyzing the level of comprehension for each attribute of Japanese, JSL (Japanese as a Second Language), and FJB (Foreigners of Japanese Birth), the Japanese were able to understand all but the most specialized vocabulary, while JSL were unable to understand many words, even those used in general texts. FJB was intermediate between the Japanese and JSL. In the term of Japanese Explanation Score (meta-linguistic ability) to explain Japanese in Japanese, JSL is directly proportional to the length of stay in Japan, but FJB varies widely, with some speakers having lower score than JSL after 3 years and 8 months in Japan, while others have the highest score overall. The criterion for judging the meaning of a word as "understood" was highly correlated with the speaker's Japanese language ability. Speakers with high Japanese language ability did not judge a word as "understood" unless it could be explained appropriately, while speakers with low Japanese language ability tended to judge a word as "understood" if they could read it.

Keywords: JSL children, FJB children, Textbook vocabulary, Explanation score, Bluff score